■帯屋町商店街小史

藩政期から現代まで

帯屋勘助

高知市は慶長八年（一六〇三）高知城の築城と共に再造発展した町である。

当初町は高知町、上町、下町の三区画からなり、東西を従町とし、南北を横町とした。帯屋町は高知町区画内の追手筋の南にあって、九町三十三関の町としてスタートしている。始めは御屋敷町または会所筋とも呼ばれた。藩侯の邸が多くあったし、また藩の政廳もあったのである。寛文年間（一六六一）には桜並木があったことで桜町とも呼ばれたこともある。

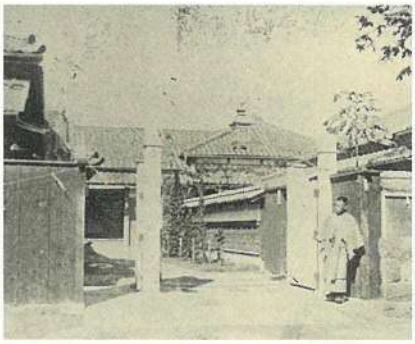
帯屋町の名称はすでに寛永年間（一六二四）の文献に初出しており、御屋敷町に許された数軒の商家の総称であった。これが二十年後の正保二年には三十数軒に増えていて、この中に勘助という豪商が出て、帯屋の勘助と呼ばれて有名になり、ついに帯屋がこの筋全体の町名となるに至ったといわれる。しかしこの帯屋町はもともと侍の町ゆえに、ここを行く時は多数の重臣に出会う。すると町人は土下座しなくてはならない。このため大変時間がかかった。このため次のような俗言が生まれた。

帯屋町
上（かみ）から下（しも）へ
ネゼロ　コゼロ

その後商店は立退を命じられ退去したが、帯屋町の名称だけは残った。現在の県庁舎はもと御屋敷と称して、藩主の別邸があり、引退後も多くここに居住した。県庁が致道館跡（その後高知監獄、現城西公園）から現在地に移ったのは明治十七年のことである。三丁目大橋通り角より西、蛤町に至る一角には、もと南会所および役人の官宅があり、維新のさい会所を致道館に移し、その後に兵営を建てた。のち勧工場となったこともある。また、市役所のあるところは山内豊道の邸跡で、東御屋敷と称し、容堂も晩年ここに住んだこともある。以上みてきたように帯屋町は、もと武家の町を、町人が乗っ取った町である。

病院街に発展

明治に入ってから西洋医学の流入と共に、帯屋町は病院街としての発展をみた。藩医をしていた町田病院が最古であるが、明治から大正にかけて北側筋に病院が多くできた。下（しも）一丁目の角、いまの西田写真館の付近には、岡村眼科があり、西隣には吉松婦人科（のち竹内小児科、さらに平井内科へと変る）そして吉本仏具店の西には倉地病院があり、中の橋を過ぎると町田病院があるといった具合であった。これらの病院はいずれも大きく、とくに楠病院は一丁目北側の大半を占め、町田病院は二丁目北側の殆どを占め、大きな門構えの白い練り塀がどこまでも続く堂々たる病院であった。前には小川が流れていて橋を渡って入っていくのである。岡村眼科の前には人力車の置場があり車夫がいつもたむろしていた。これらの合間をぬって、尾木金物や長野カツラなどがあり、南側には依光カツラや日用品を売る小さな屋並が、ずらっと並んでいた。しかし帯屋町はやはり商店街としてよりも、病院街、官庁街としての町で人通りも余り多くはなかった。それでいながら道幅だけは今と同じく十一メートルあったので、よけい閉散としていた。一丁目から三丁目へかけて道の南北に幅一メートルほどの小川（みぞ）がそれぞれにあった。この小川は公園の堀から流れてきた川で、下（しも）は土橋のある堀川へと流れ込んでいた。この川の水は青く、フナやボラ、ウナギなどがいた。大雨が降れば公園の堀の鯉も姿を見せた。だから帯屋町筋の子供にとってはそれを捕まえるのが楽しみだったという。


明治40年頃の倉地病院。

日曜市

大正時代に入ると商店街も帯屋町二丁目まで伸びた。北側に広大な町田病院がひかえているので、店は南側を占めた。帯二の南角には寺尾食堂というのがあって門前に松の木があった。その枝が道

に伸び、枝には氷の一字を染め抜いた旗がかかっていたりした。そして宗円の薬屋、洋品の大阪屋、辻の下駄屋、松本髪結、瀬戸呉服、中村京染、滝テント、毛糸の紅屋、増原古物商、岩目履物などが並んでいた。北側も町田の白い練り塀が切れたところから宮田傘屋、北条京染、横畠骨董屋、藤田小物屋、竹崎散髪屋、川崎靴屋、松浦文具屋などが並んでいた。

だが町はそれでも閑古鳥の鳴くありさまで、一丁目の角の店から二丁目はおろか三丁目の大神宮まで見透うせた。そこで町内会では町へ何とか客をひきつけようと、市内のあちこちで藩政時代から開かれていた日曜市を帯屋町にもってくることにした。このため帯屋町の店屋はそれぞれ自分の店の間口の三分の一を提供することに決めた。日曜市は市近郊の農家が自作農産物を安価に直接市民に売るもので昔から市民に喜ばれていたものだ。帯屋町にこの日曜市が立つと人出はどっと増えた。その頃は雨戸の上に商品を並べて売っていたものだが、各店も屋根から大きなテントを張り出して、残る三分の二の間口に自店の商品を雨戸に並べて売った。

岩目履物店主岩目利雄さんによれば、その日曜市一日の売り上げと、残る六日の売り上げ金がほぼ同一であったそうである。また今のダイエーショッパーズのある二丁目の付近は広っぱで、そこでは東京相撲が行われたり、化け物の見せ物小屋が立ったりしていた。洋品のはかた店主博田雅美さんが現在地で店を開いたのは大正十年であるが、そのとき家賃が三円四十五銭であったという。この家賃は中種、京町に比べて半値であった。ともあれ以上のように大正十年ごろまで、帯屋町は日曜市に頼る以外にない、商店街としては二流三流の商店街だったのである。

新開地の誕生

だが時の流れは微妙だ。大正の末に常設映画館世界館が京町に誕生し、ついで掘詰に鳳館が、さらに堺町に大山館が誕生し、新京橋界隈が流星のごとく賑いはじめた。そのころこの帯屋町から歓楽街新京橋界隈への至近の抜け道は美人小路であった。時の勢いはこの歓楽街が逆に帯屋町までふくれ上がって、新開地を誕生させ隆盛をみせはじめた、そして高知で第四番目の映画館、敷島館が大正十二年に帯屋町一丁目の新開地に誕生をみた。この敷島館は洋画専門館として開館され、チャップリンの「キッド」や、シロトハイムの「愚かなる妻」などが連続活劇として上映され、一回四巻ずつを五週ぐらいやり人気を集めた。敷島館は大正末に帝国館に変り、昭和に入って松栄館、日活館となるが、主演の坂東妻三郎や市川百之助が立ち回りで十分間も剣劇をやって満場の観客をうならせたものだ。

この頃、高知の町では「アブチ」と呼ばれる男が人気を集めていた。彼はチンドン屋代りに映画や店の大売出しの宣伝をやって人びとに親しまれた。新開地界隈には射的場も多く、そこに働くかわい子ちゃんをひやかしながら当時の若者は唯一の息抜きをした。ともあれ大正の末に入って閑散の帯屋町も一丁目界隈に人の波がかろうじて満ちはじめた。

人間ポンプ

大正末から昭和にかけて、娯楽面で客を呼んだ最大のものは、何といっても映画、演劇である。次いで射的、玉突きの順である。帯屋町一丁目の新開地にはこの三つが集中していて人気を呼んだ。当時の写真を見ると帝国館前の道路などは黒山の人出である。中折帽にインバ姿が多い。この頃を知る人にとって思い出は多かろうが、その中で「人間ポンプ」のことは忘れられまい。帯屋町一丁目の南側に有光という時計屋兼雑貨商があった。そこの息子が長ずるにつれて奇妙な芸当を行うようになった。それは胃へ飲み込んだものを何でも自由自在に吐き出すことの出来る通称〝人間ポンプ〟の芸当である。帯屋町の町内会などの肝入りで、彼は掘詰座で初公演をやった。満員の観客を前にして、彼はまず白黒の碁石を各五個ずつ飲み込み、そして白と黒とを予言しながらそれを正確に胃からもどした。金魚を飲み込み生きたままもどしたり、さらにはガソリンを飲み込んで口元に火をつけ、火災放射器のように口から火を吐きつづけた。観客はびっくり仰天した。彼はこの芸をひっさげて県下の小学校などをまわり、東京の浅草にまで出演した。ともあれこの〝人間ポンプ〟は大変な人気で昭和十二年頃には彼の姿を一目見ようとして帯屋町に人がのぞきにきたほどだったそうである。

敗戦の焼け跡から

昭和六年の満州事変以来、大陸での戦争が続いていたが、十六年十二月には米英を相手としてついに太平洋戦争が勃発した。世の中が戦争色一色に塗りつぶされる中で戦況は最初のうちは戦勝気分であったが、しだいに敗色が濃くなり、高知の町も物資不足と毎日の空襲警報で、もはや商売どころではなくなっていた。そしてついに昭和二十年七月四日未明、高知市はアメリカのB29の大空襲によって、町の殆どが全焼し、死者約五〇〇人を出した。帯屋町は灰塵と化した。残ったのはわず

かに帯屋町三丁目の弘人（ひろめ）屋敷付近だけだった。そして八月十五日に敗戦となった。高知市は焼土の中から戦後の復興が始まった。焼土から復興への槌音高く、といえば聞こえは良いが、資材は無く食糧も無く人手も無い、無い無いづくしからのスタートでなかなか大変だった。焼土の帯屋町へ新京橋から出てきた、大西時計店の大西賢吉社長は当時をこう語っている。

「私がこの帯屋町一丁目へ出てきたのは敗戦の翌年昭和二十一年のことだった。しかしここへ出てくるにはかなりの勇気がいった。なぜなら帯屋町は三流街だという戦前のイメージが強かったからだ。家族会議を何回も開いた。その結果、広い場所が欲しいこと、東宝劇場が出来るらしいということ、県庁筋だということで、思い切って移ってきた。だがここにはバラック建ての土橋洋服店、広末金物店、岡林自転車、岩目履物など四、五軒があるだけで淋しいものだった。何さま自分の店からさえぎるものなしに北の山が一望された。おまけにうちは時計店なので高価な品が多く、泥棒にねらわれるので、家族一同が商品につきっきりで寝、怖い思いをしたことだった。ある朝、起きてみると泥棒が戸をこじあけようとして出刃包丁をさしこんであった！」

また中種から出て来た宮本呉服の社長夫人は、

「帯屋町へ戦後移って来た時には、まるで他界へ来た様な気持ちで、はじめの頃は淋しさに泣いたものです。中種から島流しにあった気持ちでした。」と当時を振り返った。

戦後の逆転劇

だがこの戦前には中種や京町に押さえられて三流街に過ぎなかった帯屋町が、戦後五、六年もたたないうちに大きく変貌する。その一つは市の都市計画によって、中種や京町が片側町になる、新京橋が公園になる、といったプランが出され、帯屋町だけはほとんど手を加えない、ということが決まったからだ。そこで中種、京町の前途を憂えた商人が、どっと帯屋町へ移住してきた。前記の他に、川村時計店、松井呉服、藤原洋品、沢村帽子、山本洋品など。とはいえ帯屋町にはまだ庭先にドブ溝がそのまま流れており、街造りが急がれた。昭和二十一年に帯屋町二丁目へやって来た川村時計店社長川村増治さんは、

「帯屋町は都市計画で生まれた町ではありません。戦前からの帯屋町の住人と戦後移入して来た移入組とががっしり手を握り、汗を流して自分達の手で築き上げて来た町です。」

と力説する。

溝が埋まり、店並みが揃い、東宝劇場、松竹劇場、セントラル劇場などが生まれ、客足が押すな押すなで集中しはじめた。帯屋町二丁目には大丸百貨店が北角に生まれ客を集める。さらには県庁、市役所がある。この県庁、市役所といった官庁は、戦前までは庶民にとっては、警察同様に何となくおっかないものであったが、戦後は民主化されたせいで、その役割がちょっと変わって、庶民が足しげく通わざるを得ない場所に変化したのだ。このため高知市の人の流れが逆転しはじめた。

最大無比の客足

帯屋町は今、平日でも四、五万人の人が通っている。戦前からあった十一メートル道路は今では狭すぎるほどだ。誰が今日の帯屋町を予測し得たであろうか。それは官庁があるからだ。いや大橋通りの食品街があるからだ。市の人口が増えたからだ云々。各人のそれぞれの意見があるが、そのいずれもが当たっていよう。ともあれこの驚異的な人の流れは下から上へ、上から下へ、また中の橋、大橋通りを経て学校街へ、そして帰りには角折れして帯屋町へと。時代の変遷とはいえこれほどの変遷がまたとあろうか。藩政期の御屋敷町、その中にわずかに許された四、五軒の帯屋商店、明治以降の病院街、戦前までの日曜市に頼る以外なく、閑古鳥の鳴いていた商店街が、まさかこう繁盛しようとは神様だって知らなかったに違いない。門田眼鏡店の門田耕一さんは、矢立一本さげて、己一代で店を張っている商店主が「明治寿会」というのを作っておりその会員の一人だが、

「商店街は放っておいても自然に出来上がるものではなく、創るものです。そのためには商店の団結の力が何よりも必要です。」

と力説する。

未来に向けて

この、高知県下最高の客足をもつ帯屋町商店街にも、もちろん課題がない訳ではない。高速道時代を迎え、今までにはなかった県内外からの様々な動きに、高知県を代表する中央商店街として、適切・機敏な対応が望まれている。先人が築いてきた歴史の上にたって、未来を切り開く若い世代に期待する向きは多い。

ともあれ時代は日進月歩で進み、一歩も立ち止まることを許さない。今、帯屋町商店街は現状に甘えることなく、大きな団結をして、常に前進を続けることを義務づけられている。帯屋町商店街および高知県の益々の発展のためにもそのことを心から望みたい。

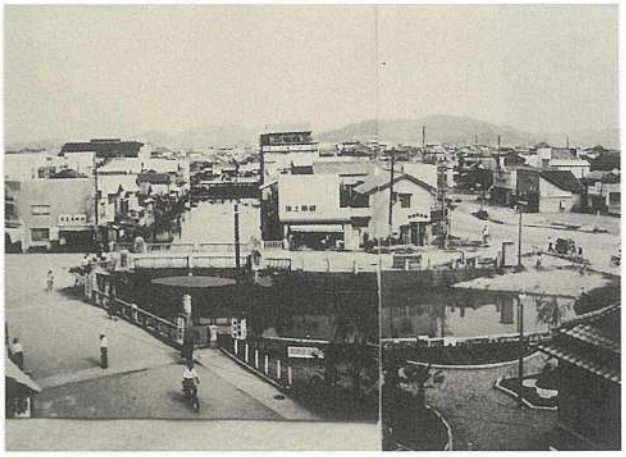
（土佐文雄）

戦後の帯屋町1丁目。行き交う人々の服装が当時を物語っている。

昭和30年頃の中央公園北入口付近。

昭和28年、帯屋町1丁目での商工祭の一コマ。

昭和20年代末の追手筋。左手遠方に高知城が見える。


現在の高知大丸前の昭和24年当時。まだ堀川がある。

昭和31年5月の帯屋町夜景。

旧アーケード建設記念大売り出し。（昭和36年）